

## 紀伊国阿弓河莊とその史料（続篇）

——高野山金剛峯寺の旧領回復訴訟をめぐる——

付 阿弓河莊関係史料目録（三）

伊藤哲平・鎌倉佐保

### はじめに

本稿は、本誌第五一四—九号に掲載された「紀伊国阿弓河莊とその史料—阿弓河莊研究の課題<sup>①</sup>—」及び本誌五一七—九号に掲載された「紀伊国阿弓河莊とその史料—建治相論の再検討<sup>②</sup>—」の続篇である。前篇では主として莊園領主円満院の直務支配の段階について、後篇では阿弓河莊研究で多くの注目を集めてきた建治相論を取り上げ、相論の過程を明らかにした。

本稿では、建治相論後、高野山金剛峯寺が本格的に阿弓河莊の寺領化に乗り出した段階の、金剛峯寺と円満院との相論、および地頭湯浅氏との抗争についてその過程を具体的に明らかにし、あわせて阿弓河莊関係史料目録の補訂を行いたい。

この段階の阿弓河莊についての先行研究は、大きく二つの視角からの研究がある。ひとつは阿弓河莊の個別研究として、その歴史過程を明らかにした研究で、一九七八年の仲村研による研究が、史料に基づきその過程を具体的に明らかにした基礎的な研究である。その後、高橋修により阿弓河莊の歴史が概説的に叙述され、建治相論後の金剛峯寺

の寺領化の過程はこれらによってほぼ明らかにされている。

円満院と地頭湯浅氏との法廷闘争（建治相論）がうやむやに終わると、寂楽寺別当任快は建治三年（一二七七）阿弓河荘の立券文書を金剛峯寺に譲渡し、ここから金剛峯寺による本格的な寺領回復運動がはじまった。まず金剛峯寺は離山閉門という強硬手段を用いながら訴訟を展開し、ついに嘉元二年（一一三〇）四月、後宇多院院宣と円満院からの避状を獲得して寺領化を実現した。すると今度は地頭湯浅氏排除に転じ、金剛峯寺は、阿弓河荘は弘法大師御手印縁起の内であるという主張を掲げ法廷闘争をおこなうが、結局は地頭湯浅氏を排除することはできなかった、というのがそのおおよその過程である。仲村は、円満院との訴訟の段階では、金剛峯寺が有利な形勢にあり、現実の支配においても僧侶を現地に臨ませて直務支配の既成事実をつくりつつあり、地頭も恭順せざるを得なかったとし、しかし嘉元二年寺領化実現後には、地頭の恭順にもかかわらず金剛峯寺と地頭との対立は深刻化し法廷闘争となったとした。高橋も金剛峯寺の寺領化の過程は仲村とほぼ同様に捉えたが、湯浅氏との関係については、金剛峯寺は湯浅氏との大同団結によって円満院に対抗し、そして寺領化実現後には地頭を排除しようとしたが結局排除できず、金剛峯寺から上荘預所に補任された禅海が地頭湯浅氏と癒着しながら現地支配に臨もうとしていたことなどを明らかにして、政治力や武力を背景に地域権力として在地に支配基盤を築いてきた在地領主湯浅氏の現実的支配の強力を浮かび上げさせた。

仲村と高橋とは、金剛峯寺と地頭に対する評価の違いがあるが、訴訟過程において仲村がいうように果たして金剛峯寺は有利な形勢にあったのか、またこの段階でどれほど現実的な支配を実現できていたのかは検討の余地があり、訴訟の過程についても訂正すべき部分があり、改めて史料分析をおこない訴訟の過程を検証することが必要である。また高橋は、高野山が円満院から阿弓河荘を勝ち取ることができた背景として、円満院門跡の側が阿弓河荘支配の熱意が失われたことを想定し、同時に在地領主側の現実的支配を重視するが、しかし円満院側も決してすぐに手を引いたわけではなく、また金剛峯寺の地頭排除は結局は実現しなかったものの、かなり執拗に行われており、なぜ金剛峯

寺が現実的支配をおこなう地頭の排除を目指していったのかについても、改めて検討する必要がある。そしてこの点については、次に示すこの時期の金剛峯寺領全体の動向を踏まえて理解する必要がある。

もうひとつの視角からの研究が、空海の御手印縁起を用いた金剛峯寺による旧領回復をめぐる研究である。御手印縁起については戦前以来、真偽や偽作の時期・目的について研究がなされてきたが、一九八七・八八年に小山靖憲が、御手印縁起が高野山の寺領荘園の獲得・拡張の手段として、また地頭排除の手段として使用されるようになったことを論じて以降、金剛峯寺の寺院組織の自立化や惣寺権力確立と旧領回復による膝下荘園確保との関係、御手印縁起そのものの史料学的検討、御手印縁起の機能や効力をめぐる問題、御手印縁起を用いた旧領回復運動の実態など多くの研究が蓄積されてきた。<sup>⑥</sup> そのなかで、海津一郎は、高野山の旧領回復運動が、安達泰盛が主導した鎌倉幕府の弘安徳政をうけて展開したことを明らかにし、さらにそれと関連して永仁年間に紀州悪党蜂起とそれに対する幕府の軍事行動による鎮圧（永仁の御合戦）が起ったことを明らかにした。<sup>⑦</sup>

阿弓河荘は、十一世紀初頭から断続的に金剛峯寺が御手印縁起を用いながら領有を主張し、そしてついに寺領化を実現した事例として注目され、旧領回復をめぐる研究では必ず取り上げられてきたが、基本的には仲村による基礎的な研究を前提としている。本稿では、旧領回復運動をめぐる研究も踏まえながら、改めて建治相論後の金剛峯寺領化の過程と地頭排除訴訟の過程を明らかにすることを課題としたい。

なおその際、以下の点に留意したい。第一に、高野山文書のなかには、円満院との相論でも、地頭湯浅氏との相論でも、高野山側が訴えられた訴状が残存していないことである。<sup>⑧</sup> 金剛峯寺は訴訟において、論人としてではなく、あくまで訴人として裁判に臨もうとする姿勢も見られ、訴状を残さなかったのも意図的であったと考えざるを得ない。本稿では残されていない文書にも留意しながら、相論の過程を見ていくこととする。<sup>⑨</sup>

二点目は、金剛峯寺と地頭湯浅氏との抗争については、これまで荘園領主対地頭の対立構造により、荘園支配をめぐる対立として捉えられるむきがあったが、地頭との抗争は、荘園支配をめぐって生じた対立というよりは、金剛峯

寺ははじめから地頭排除の方針で一円寺領化を目指しており、実際に莊園経営にあたる預所との間には方針の違いもうかがえることである。そのことも踏まえ、金剛峯寺にとって阿弓河莊寺領化と地頭との抗争がどのような意味をもっていたのかを考えたい。

## 一 高野山金剛峯寺と阿弓河莊

### (一) 阿弓河莊の領有と金剛峯寺

まずは前提として、金剛峯寺による阿弓河莊の「回復」をめぐる動向について確認しておきたい。

長保三年（一〇〇一）平惟仲が寂樂寺に石垣莊を寄進してすぐに、寛弘元年（一〇〇四）金剛峯寺は、空海に高野山四至内の領有を認めた弘仁七年七月八日太政官符を引用しながら寺家所領がかの莊領地に打ち籠められたことを訴え、それにより朝廷から惟仲所領四至と山地田畠の調査を命じる太政官符が下された。<sup>(11)</sup>これが金剛峯寺が御手印縁起を用いた最初の事例である。小山は弘仁七年官符を含む御手印縁起が十二世紀末に制作されたと捉えたため、寛弘元年太政官符自体も偽作であるとしたが、このとき問題とされていたのは正暦五年（九九四）火災で焼失した伽藍再建のための雑役賦課の問題であり、この段階には御手印縁起が作られていたとする赤松俊秀説に従いたい。<sup>(12)</sup>

その後、金剛峯寺は長寛二年（一一六四）に寂樂寺を訴えたことがわかるが、その後平氏政権下の治承四年（一一八〇）金剛峯寺は荒川莊と撰関家領田仲莊・法成寺領吉仲莊との堺相論において御手印縁起を用いた訴訟をおこない、田仲莊・吉仲莊の濫妨停止を命じる高倉院序下文を得たが、御手印縁起自体が判決に用いられたわけではなかった。<sup>(13)</sup>荒川莊訴訟と同時に、金剛峯寺は阿弓河莊についても訴訟を提起した。しかし阿弓河莊については裁許を得ることはできなかった。<sup>(14)</sup>

寿永三年（一一八四）平家都落・一ノ谷合戦の後、金剛峯寺は源義経に「弘法大師御領最中紀伊国阿弓河御庄」を

寂楽寺の所司が押領していることを訴えて、狼藉停止の外題および書状を獲得し、さらに鎌倉の頼朝の元に「当山結界絵図并御手印案文等」を進覧して、阿弓河荘への寂楽寺僧徒の乱入、非法狼藉を訴え、元暦二年七月二日頼朝袖判下文を得ることに成功した。<sup>(17)</sup>しかしこれに対して寂楽寺は田満院門跡鳥羽宮定恵法親王（後白河院第五皇子）を本家とし、その權威をもって、頼朝に訴えて「元暦二年十二月九日御下知状」を得た。<sup>(18)</sup>金剛峯寺は、文治二年（一一八六）二・三月には三宝房長安・弟助光を下司に任じて実力で現地支配を行おうとしたが、鳥羽宮定恵法親王の訴えにより金剛峯寺による阿弓河荘支配は押領とされ退けられた。<sup>(19)</sup>

以後阿弓河荘旧領回復をめぐる訴訟は建長八年（一二五六）まで見られない。その間、建保七年（一二一九）金剛峯寺は吉野金峯山寺との間で中津川の領有をめぐり相論となった。このとき後鳥羽院は御手印縁起の「南堺阿弓川南横峯」が高野山堺であることを認めたが、中津川の領有については「新儀」として否定されることになった。<sup>(20)</sup>しかし、金剛峯寺にとっては後鳥羽院によって御手印縁起の四至内の領有が「旧跡」として承認されたことは重要な意味をもち、白井克浩は、ここに金剛峯寺衆徒による旧領回復運動の達成目標が明確化されたとしている。そしてそのことによって、阿弓河荘の領有の実現が金剛峯寺としてより重要になったと考えられる。阿弓河荘の領有が認められなければ、金剛峯寺が主張する御手印縁起に基づく旧領の南堺も認められなくなる可能性が生じるからである。実際に、貞応（一二二二～二四）の頃、柿田荘や神野荘をめぐって金剛峯寺と神護寺とが相論になった際に神護寺側から「旧領御手印と申候事は、彼御手印四至内、皆被付高野候へくは、非一口論候、彼旧領内、皆以他領也」「阿弓川庄ハ、寂楽寺領（付法勝寺）」<sup>(21)</sup>と言われているように、御手印縁起による旧領の範囲内であっても、阿弓河荘が金剛峯寺領ではないことが相論で持ち出されていた。

しかし金剛峯寺から積極的に旧領回復が主張されたわけではなく、建長八年（一二五六）になって、金剛峯寺は後嵯峨院に対して、野川・中津川郷、阿弓河荘、神野真国荘内石走村を御手印縁起四至内であるとして返還を求める訴訟を起こしたが、白井克浩によれば、この旧領回復訴訟は後嵯峨院による神領回復令を直接的な契機とするものであつ

たことが明らかにされている。<sup>(23)</sup> 金剛峯寺はこのとき阿弓河莊については寛弘元年官符、御手印縁起の内であることを認めた元暦元年右大將家下知状を根拠として返還を求めた。しかし、この訴えも結果を示す文書は残されていないことから、失敗に終わったのだろう。このように、阿弓河莊に対して金剛峯寺は十一世紀初頭段階から旧領内という認識を持ち、たびたび旧領回復の訴訟は行っていたものの、それを本格的に展開することはなかった。

## (二) 阿弓河莊立券文書の入手——建治相論の結果とその影響——

この間、阿弓河莊は本家円満院・領家寂楽寺によって領有されており、前稿で明らかにしたように、正元年間（一二五九—六〇）以降地頭湯浅氏との間で莊園支配をめぐる相論がおこり、建治元年（一二七五）地頭湯浅氏の非法を訴えた百姓等の仮名書言上状をきっかけとして、六波羅法廷での訴訟となった（建治相論）。

建治相論の六波羅法廷での裁判結果は判然とせず、建治二年の六—七月にかけて訴陳が番えられ、<sup>(24)</sup> 同年八月六日以降地頭湯浅宗親が妻女の伯父が関東で死去したことを理由に陳状を提出しなかったのを最後に、<sup>(25)</sup> 相論に関する文書は一切みられなくなるが、地頭湯浅氏が罪科に問われずに阿弓河莊に存在し続けていること、これ以降円満院の関与がまったく見られなくなること、寂楽寺別当任快が証拠書類を返却しなかった円満院に対し不満を抱いていたこと<sup>(26)</sup> ことから勘案すると、事実上、円満院側の敗訴という結果に終わったとみられる。<sup>(27)</sup>

円満院の訴訟が失敗したことによって地頭排除を目指していた寂楽寺の立場は危機的なものとなった。ここに寂楽寺別当任快は、阿弓河莊立券文書の正文や副状などを金剛峯寺へ譲渡したのである。<sup>(28)</sup> 任快は、地頭排除という長年の宿願を達するため、対地頭相論に勝てなかった円満院ではなく金剛峯寺を頼る道を選んだのである。金剛峯寺としては、これまで失敗してきた「旧領回復」のチャンスが、このような形で舞い込んだのである。あるいは任快に対して金剛峯寺からの働きかけがあったのかもしれない。ともかくも、この建治三年（一二七七）十二月の任快による阿弓河莊立券文書の金剛峯寺への譲渡が、金剛峯寺による本格的な阿弓河莊旧領回復の動きのはじまりとなった。

## 二 金剛峯寺による阿弓河荘の獲得

(一) 金剛峯寺による阿弓河荘「旧領回復」運動のはじまり

仲村の研究以来、阿弓河荘の立券文書を獲得した金剛峯寺は、ただちに翌年の弘安元年（一二七八）、離山閉門を行って寺領化を訴えたとし、旧領回復への強硬姿勢を示したと捉えられてきた。しかし、根拠となった文書は第二紙に誤って別文書が貼り継がれており、離山閉門は弘安元年のことではない（離山閉門については後述）。金剛峯寺がまづおこなったのは、預所の得分や莊務について取り決め、預所に寺僧勝算を補任したことであった。<sup>(29)</sup>寂楽寺の預所を引き継いで、金剛峯寺が預所の補任をおこない莊園支配に乗り出したのである。

しかし金剛峯寺が支配に乗り出すや、円満院が即座に訴訟を起こした。弘安六年（一二八三）に金剛峯寺は改めて諸衆一同の評議により上村預所に琳舜房真算を任命したが、そのとき真算を預所に補任した理由について、「当庄事、云 公家、云六波羅、既被付敵方之處、琳舜房於関東申開子細、及御沙汰之条、奉公異于他之故也、」とあり、この間、朝廷・六波羅での訴訟があり、当荘が「敵方」に付けられてしまったが、真算が関東に申し開き、関東での訴訟に持ち込んでいたこと、その功績により預所に任命されたものであったことが読み取れる。金剛峯寺が最初の預所を任命し阿弓河荘支配に乗り出そうとするや、円満院側は朝廷・六波羅訴訟に及び勝訴を得ていたのである。

真算は関東への申し開きに功績があったと記されているが、実際にはそれほどうまくいったとは考えられない。それから六年後の正応二年（一二八九）、金剛峯寺が提出した訴状をうけて、鎌倉幕府から円満院に元暦元年（二月九日）の下知状正文の有無の問い合わせがなされた。<sup>(31)</sup>『高野春秋』によると、正応二年七月、寂楽寺が元暦元年（二月九日）関東下知状を所持していると奏達し、阿弓河荘を押領したので、金剛峯寺から関東に訴えたのだとしている。<sup>(32)</sup>『高野春秋』では訴訟相手を寂楽寺と記し金剛峯寺側から訴えたように記しているが、実際にはその前に円満院側からの訴訟（奏達）があり、それに対抗するかたちで金剛峯寺からも提訴がなされ、円満院に対する問状が出されたということだ

ろう。『高野春秋』では金剛峯寺にも元暦元年の七月二日の証文（源頼朝下文）を提出せよと仰せ下されたとあり、双方、頼朝下文の対決となっている。

この間の円満院との訴訟に関してはこのほかに関係文書が残されていない。そのこと自体が、金剛峯寺にとってこの訴訟がうまくいかなかったことを示しており、決して金剛峯寺が訴訟で優位であったわけではなかった。

円満院との相論が行われている間、弘安八年（一二八五）、金剛峯寺は幕府の弘安徳政の後押しを得て、御手印縁起を用いた旧領全体の回復訴訟がおこなわれたことが海津一朗によって明らかにされている。<sup>(33)</sup>しかしこのとき金剛峯寺が旧領回復を訴えた注進状には、御手印縁起の四至のうち東堺内の三ヶ所、西境内の五ヶ所が記されているが、南堺に位置する阿弓河荘は問題とされていない。この時金剛峯寺は旧領全体の回復を主張したとされてきたが、円満院との訴訟は、この旧領回復訴訟とは別個に行われていたということになる。

その後、永仁四年（一二九六）金剛峯寺は寂楽寺雑掌を相手として幕府法廷に訴えを出したが、幕府は、阿弓河荘は関東進止の地ではないとして、幕府法廷での訴訟を受け付けず、聖断に委ねると通達した。<sup>(34)</sup>結局幕府訴訟では解決することができず、これ以後、金剛峯寺は朝廷へ提訴して、円満院と訴訟をおこなっていくこととなる。

さて金剛峯寺はこの間に、湯浅氏との間で契約を交わしていた。正応三年（一二九〇）三月二〇日、湯浅浄智（保田宗家）は、阿弓河荘が「大師御手印地」であることを認め、所務においては新儀非法を行わないことを約した請文を提出したのである。<sup>(35)</sup>湯浅党の盟主としての立場にあった浄智（宗家）が阿弓河荘の問題に関与し、請文を提出したことに、仲村は、金剛峯寺が訴訟で有利な状況にあり、現地支配においても直接支配の既成事実をつくりあげ、地頭も恭順せざるを得なかったとしたが、右にみたように円満院との訴訟では金剛峯寺はかなり不利な状況にあり、また現地で直接支配が行われていたことも確認できない。<sup>(37)</sup>一方高橋修はこれを、金剛峯寺と湯浅氏との間に円満院門跡を阿弓河荘から逐うための大同団結が組まれたものと評価した。<sup>(38)</sup>たしかに金剛峯寺が預所として支配に乗り出し、円満院との訴訟を進めるにあたって、湯浅氏との連携は必要なことであったのだろう。しかしこの連携も一旦のこと

で、金剛峯寺は円満院との訴訟の決着を待たず、すぐに地頭湯浅氏排除の姿勢をあらわした。

永仁年間（永仁二年（一二九四）四月前後～永仁四年（一二九六）一〇月以前）にいわゆる「高野合戦」（「紀州御合戦」）がおこった。<sup>39</sup>これは紀州悪党蜂起に対する幕府の鎮圧派兵の合戦で、「寺領庄官追放すべし」との関東御事書により、六波羅探題から派遣された使節が紀伊国小倉・三毛・調月・荒川・真国・阿弓河等の各荘に派遣されて、「悪党」「悪行人」として追放された事件であったことが明らかにされている。このとき阿弓河荘も、丹後前司（六波羅評定衆長井重茂か）<sup>40</sup>が派遣されて、「寺領一円の荘官」として地頭が追放されてしまったのである。<sup>41</sup>山陰加春夫はこのとき対象とされた地域・人々に対しては金剛峯寺衆徒側から訴訟提起が前提にあったことを明らかにしており、阿弓河荘でも金剛峯寺側からの事前の訴訟提起があったものとみている。金剛峯寺は幕府の軍事力を用いた悪党追捕の動きに乗じて、阿弓河荘においても地頭追放をはかったのである。

しかしこれに対して阿弓河荘地頭湯浅金加羅丸が幕府に訴えを出し、永仁六年（一二九八）八月七日幕府より「関東代々御下文」を所持していることを理由として「早止追放儀、可安堵本職」という下知状が下された。金剛峯寺は、幕府の全面的な後押しのもと旧領回復を進めようとしたが、阿弓河荘に対してはこの段階ではまったくうまくいってはいなかったのである。

それでも金剛峯寺は現地支配を強行しようとしたとみられるが、浄智も、乾元二年（一二三〇）閏四月、鎌倉幕府に「高野山金剛峯寺の衆徒が違乱・狼藉を致している」として金剛峯寺を提訴した。<sup>42</sup>

## （二）離山閉門の大訴

金剛峯寺が永仁四年（一二九六）以降、朝廷に起こしていた訴訟も、いまだ判決が出されるには至っていないかった。乾元二年（一二三〇）六月には、阿弓河荘訴訟に功績があったとして新たに三宝院遊蓮房阿闍梨が当荘上村地頭に任命されているが、訴訟に何らかの進展があった様子はない。そして浄智からも提訴がなされるという状況のなか、乾

元二年（一三〇三）、金剛峯寺は、全山あげての離山閉門の大訴に及んだのである。

金剛峯寺衆徒は、離山閉門にあたり、以下の取り決めをおこなった。<sup>(45)</sup>

（端裏書）「阿弓川庄離山間事、」

### 定 離山閉門間事

條々

一 阿弓川庄事、寺訴不達、当山失面目之時者、縦雖為公家武家之命、一切不可令帰山、又沙汰未断之間、不同、為少々、恣不可登山、又別所中同称有 公家武家之御気色、可帰住之由、雖令申、惣不可免除之、

一 以別所存、申賜 院宣、或申下宗家御教書、或伺得檢校気色、為乱此大訴、及蜂起張行之時者、可奉廢置長者貫主、於張本者永追却山上山下、到慈尊出世、再不可許交衆事、

右條々如斯、抑当山之興廢、住侶之存否、只在此大訴、依之為諸衆一同之評定、重定置之上者、雖為一箇条、全不可違失、

（後欠）

阿弓河莊の訴えが達せず、もし当山が面目を失ったならば、朝廷・武家の命であっても、一切帰山しないこと、また判決が下されない間は、勝手に登山してはならないこと、また別所のなかに同じく朝廷・武家のご意向があるので帰住したいと申す者があっても、一切免許しない。さらに、別の意図をもって院宣を申し給わったり、あるいは宗家（東寺長者）御教書を申し下したり、あるいは檢校の気色を伺い得たりして、この大訴を乱すために蜂起しようとした場合には、長者貫主を廢して、張本を山上山下から永遠に追却するとした。

金剛峯寺衆徒は、阿弓河莊領有の裁許を得ることを、当山の興廢、住侶の存否を決するものとして、離山閉門の噓

訴に及んだのである。これは朝廷訴訟も進展せず、さらに地頭排除にも失敗した状況のなかでの最終手段であった。この事態をうけて六月二日、後宇多院は、たとえ理訴であったとしても「噉々の沙汰」をしたならば裁許できないとして、金剛峯寺側に早く門戸を開き本寺に帰住するよう命じた。<sup>(46)</sup>しかし八月になっても事態は収まらず、亀山院も、噉訴は禁制であるからまずは帰住するよう命じ、御手印縁起・弘仁官符が分明である以上は、正当な判決がでるだろうとして、衆徒を宥めようとした。<sup>(47)</sup>もはや事態を収束させるには、御手印縁起・弘仁官符を根拠とする金剛峯寺側の主張を容れて裁許を下す以外にはない状況であった。

ここに至りついに後宇多院は、阿弓河荘が金剛峯寺の当知行であることを認める院宣を發した。<sup>(48)</sup>そして翌嘉元二年(一二〇四)三月、後宇多院は、円満院宮恒助法親王の避状も取って金剛峯寺側に送り、阿弓河荘を金剛峯寺領であることを正式に承認したのである。<sup>(49)</sup>御手印縁起に基づく旧領回復については、御手印縁起が旧領回復に実質的な役割を果たしたとする小山の見解と、御手印縁起は後付けであり寺領化実現の条件は在地領主の現実的力関係を重視する高橋の見解があるが、この経過から明らかになるのは、阿弓河荘においては、そのいずれもが寺領化実現に効果を發してはならず、離山閉門という手段によってしかそれをなしえなかったことである。それが嘉元二年阿弓河荘寺領化実現の実態であった。

しかし金剛峯寺は、ここに寺領化をなしたことによって、御手印縁起を前面に掲げてこの後地頭排除を目指していくことになる。

### 三 金剛峯寺による地頭排除訴訟の開始

#### (一) 金剛峯寺の阿弓河荘支配の開始

後宇多院の院宣・円満院宮の避状を獲得した金剛峯寺は、嘉元二年四月に、この間の円満院との相論が決着したた

め院宣・避状などを一括して「阿弓河庄沙汰間文書目録」をまとめた。<sup>(50)</sup>そしてすぐに、阿弓河庄の一円支配を目指して、諸衆一同の取り決めをおこなった。

まず、四月に作成された置文では、荘務に関して大検注を行い、寺家・荘家の興隆をはかること、荘務の沙汰においては親類や師弟関係などによる私曲評議を加えないこと、阿弓河庄のことについては諸衆一同の沙汰とし、特に骨張（張本人）を立てないこと、寺僧がこの沙汰を乱したり罪を犯したりした場合には追放処分とする<sup>(51)</sup>。さらに、五月の置文では、一円所務を行うに際して、地頭を名乗り高野山に敵対する者が、荘官職を望んだとしても聞き入れ<sup>(52)</sup>てはいけないこと、地頭の親類・縁者と同宿してはいけないことなど、地頭との癒着を規制する取り決めがなされた。こうして金剛峯寺は、諸衆一同の結束をはかるとともに、具体的な阿弓河庄の支配方針を決め、阿弓河庄支配を開始しようとしたのである。

そして同じく四月には、湯浅浄智に対して、改めて正応三年（一二九〇）に提出していた所務に関して新儀非法を行わないとする請文の内容に相違ないことを確認した。<sup>(53)</sup>このとき、金剛峯寺は浄智に対しても、「嗷嗷の沙汰」をちらつかせて再度の誓約を迫ったようで、浄智は驚きながら「御先師阿闍梨御房の時に請文を進上しており、今更相違はない。」と返答している。

しかしこれらの金剛峯寺の動きは、この後実行された地頭排除の實力行使の準備であったようである。この年の六月、上荘預所禪海・下荘預所良朝、その他寺僧三〇名が、毛原左衛門入道父子、名手野上三郎など周辺の在地領主と与力人として阿弓河庄に乱入し、地頭湯浅氏を追い出した。

浄智はすぐさまこの寺僧による濫妨・狼藉を幕府に提訴したが、<sup>(54)</sup>金剛峯寺はここに本格的に地頭湯浅氏を阿弓河庄から排除すべく動き出したのである。

## (二) 地頭湯淺氏排除へむけた動き

嘉元二年六月、淨智による訴えとともに、地頭湯淺西仏（宗親）も、打ち入った寺僧・与力人の交名を作成し、幕府に提訴した。この訴状は残されていないが、幕府から下された御教書に対して、金剛峯寺衆徒が東寺長者に事情を説明した請文案が残されている。<sup>(55)</sup> それによれば、金剛峯寺は阿弓河莊を当山領として承認する院宣が下されたため、寺家一円領の傍例や幕府が地頭廃止を認めた先例にのっとって、地頭職を停止するよう関東に訴えていたところであるが、西仏は、この寺訴を妨げるために、寺僧が西仏の身を追い出し神木を立て武家役を押妨したという跡形もない謀訴を行ったのだと説明した。ここからは、金剛峯寺がすでに地頭排除を求める幕府への提訴を準備していたことがうかがえる。またここでは、淨智からの乾元二年・嘉元二年六月の二度の訴状が高野山側に届いていなかったとも述べており、離山閉門の混乱によるものか、淨智の訴状が通達されていなかった可能性がある。だが、金剛峯寺内でも、このときに阿弓河莊の事に関して寺家の若輩が蜂起するなど少なからず混乱した状況となっていた。<sup>(56)</sup>

金剛峯寺では幕府訴訟をはじめるにあたって、改めて結束を強化し、諸衆一同で評議して対処していくことを約した一味契状を作成した。<sup>(57)</sup> この一味契状では、「諸衆一同之評議」や「満寺一味之沙汰」とすべきとの表現が多く使用され、「公私之内縁」や「秘計」などがあった場合は、速やかに追放処分とすることなどが預・行事・年預以下衆徒四百十二人の連署によって定められた。

このような一味契状が作成されたこと自体、実際には湯淺氏側との縁をもち「満寺一味の沙汰」を乱す動きがあったことを示しているが、実際に上村預所であった禪海は、湯淺一族との関係から賄賂や内通を疑われていた。

それを否定した禪海の起請文によれば、<sup>(58)</sup> 禪海は、湯淺党の田仲尾藤太の子息彦太郎の由緒により淨智と親子の関係にあり、また淨智の子七郎兵衛尉（宗村）とも師弟関係を結んでいた。そのため、淨智請文から「喧嘩」の二文字を消し、湯淺氏に都合よく改竄したのではないか、また、このような由緒因縁から淨智・七郎兵衛（宗村）と内通・引汲したり、西仏・宗保等、地頭を称する一類と内通・引汲したりするのはないかと疑われたのである。禪海はこれ

らを否定し、一事たりとも御山に対して不忠をしないということを、起請文によって誓約させられたのである。

禅海が湯浅氏一族と昵近な関係にあったことは高橋修も注目しているが、現地支配を実現していくためには、このように地頭一族との関係をもつことが必要であり、それが現実的な方法でもあったと考えられる。しかし、金剛峯寺衆徒は、そうした在地での慣例に基づいた現実的な支配ではなく、あくまで地頭の完全なる排除を目指していた。こうして金剛峯寺による湯浅氏排除の幕府訴訟が開始されていくことになる。

### (三) 残存しない金剛峯寺に対する訴状——高野山文書をめぐる課題——

さてここで、高野山文書のなかの相論に関連する文書の残存状況について述べておきたい。

すでに金泰虎が、高野山文書として残されている阿弋河莊文書には寂楽寺や円満院に伝えられたものが含まれており、伝達経路を明確にしないまま研究に取り組むことの危険性について指摘しているが、問題は伝達経路だけでなく、相論関連文書についても、高野山文書内に残っていないものが一定数存在しており、相論を復元する上で取り扱いに注意が必要である。

はじめにでも触れたように、特に建治後の相論に関連する文書においては、金剛峯寺への訴状や敗訴に終わったとみられる訴訟関係文書が残されていない点に注意が必要となる。円満院との相論では、少なくとも二回、訴状が出されているはずであるが、それらは残存していない。また地頭湯浅氏との間では、淨智による乾元二年・嘉元二年の二度の訴状も、同じく嘉元二年の西仏の訴状も残されていない。案文も残していないのである。一方、金剛峯寺側が作成した訴状は案文・土代、具書案などが残され、金剛峯寺の訴状に対する陳状も案が残存している。金剛峯寺側は、訴えられてもその訴訟に応じるのではなく、みずから訴えるかたちを一貫して取っており、訴訟に対する姿勢がうかがえるが、文書の保管に関しても、金剛峯寺自身が不利になる訴状や判決については残さない方針であったことが考えられる。文書残存のあり方については今後さらに検証が必要である。

年月日	出来事（※は高野山文書内の文書の残存状況）	典拠
建治3年12月	寂楽寺の別当任快（法印）が阿弓河荘の公驗を金剛峯寺へ譲渡	阿242
弘安1年8月	金剛峯寺が阿闍梨勝秀を阿弓河荘の預所に補任	阿244
弘安6年以前	円満院（寂楽寺）が朝廷・六波羅に提訴（※訴状なし）	阿299
弘安6年4月	金剛峯寺が琳舜房入寺真算を阿弓河上村の預所に補任	阿299、『高』又続34-401
正応2年7月頃～永仁4年8月頃	金剛峯寺と寂楽寺が元暦の下知状をめぐり相論（※訴状なし）	阿250、253、268
乾元2年閏4月	湯浅宗家（浄智）が金剛峯寺の違乱・狼藉を提訴（※訴状なし）	阿303、304、305
乾元2年6月9日以前	金剛峯寺が離山閉門を計画	阿244
乾元2年6月9日	東寺長者に対して離山閉門を中止せよとの後宇多院院宣が出る	阿276
乾元2年6月	金剛峯寺が三宝院遊蓮房阿闍梨を阿弓河上村の預所に補任	阿277
嘉元1年8～9月	御手印縁起・弘仁官符の記載を認める院宣が出る	阿278、282
嘉元2年3月	円満院の避状と高野山による阿弓河荘の知行を認める後宇多院院宣が出る	阿284、287
嘉元2年6月	湯浅宗家（浄智）が金剛峯寺の違乱・狼藉を提訴（※訴状なし）	阿303、304、305
嘉元2年6月	湯浅宗親（西仏）が金剛峯寺の寺僧らが阿弓河荘へ打ち入ったことを提訴・交名を注進（※訴状なし）	阿292、294
嘉元2年8月18日	金剛峯寺の寺僧良祐が阿弓河荘の訴訟に使用する文書を準備	阿297
嘉元2年10月	金剛峯寺が湯浅宗家（浄智）による「一事両様」の訴訟を提訴（※訴状あり）	阿303、304、305
嘉元2年12月16日以降～嘉元3年5月	金剛峯寺が地頭湯浅氏一族の排除を要求し提訴（※訴状あり）	阿306、308、309
嘉元3年6月	金剛峯寺の訴訟準備のため鎌倉で上村預所の禅海が奔走	阿291
嘉元4年8月16日	幕府から湯浅宗家・宗村に対して弁明催促の召文が出される（※召文あり）	阿310
徳治2年8月	地頭湯浅氏が陳状を提出（※陳状あり）	阿314
徳治3年1月22日	禅海が阿弓河荘の訴訟に使用した文書を返却	阿297

#### 四 本格化する地頭排除の法廷闘争と金剛峯寺の劣勢

金剛峯寺では嘉元二年（一三〇四）八月、幕府に地頭湯浅氏を訴えるための関係文書が取り出されるなど、訴訟の準備が進められていた。<sup>(60)</sup> 先に見たように、金剛峯寺は浄智から二度、西仏からの訴状も含めて三度、湯浅氏から訴状が出されていた。しかし金剛峯寺は、訴えられた裁判に応じるのではなく、逆にみずからが提訴して地頭との裁判をおこなおうとした。

嘉元二年（一三〇四）一〇月一四日、金剛峯寺はまず、乾元二年・嘉元二年の浄智からの提訴は、同じ内容で二度訴えを起こした「一事両様」の訴訟であるとして、訴訟を一件に寄せるよう幕府に訴状を提出した。<sup>(61)</sup> 嘉元二年時の担当奉行人であった飯尾六郎頼定は、その日のうちに二件の訴訟をまとめて審理すべく、乾元二年時の奉行人である津戸出羽入道尊円に金剛峯寺の訴状を申し渡した。<sup>(62)</sup> その三日後の一七日、金剛峯寺は、浄智・西仏・定春らが一事両様の訴訟をおこなったことは明らかであり、その咎により彼らを罪科に処すよう求める訴状を提出した。<sup>(63)</sup> そして一〇日余り過ぎた同月二十九日、金剛峯寺はたたみかけるように、一事両様は明らかなのにどうして御猶予しているのか、と庭中奉行に訴えた。<sup>(64)</sup> 幕府奉行人は、金剛峯寺からの訴えにすぐさま浄智訴訟を一件とする手続きはとったものの、金剛峯寺の訴えを取り上げるのには慎重であったようである。

そしてようやく二月一六日に開かれた御評定で、「宗光承元四年賜御下知之後、高野山不申子細之上者、不及御沙汰」という判断が下され、湯浅宗光が阿弓河莊地頭に任じられた承元四年（一二一〇）以後金剛峯寺は訴えなかったとして、訴えは棄却された。<sup>(65)</sup>

金剛峯寺はなおも引き下がらず、改めて「地頭湯浅兵衛尉宗光跡と称する輩等」を排除するよう求めて内奏をおこない、さらに二度内容を添削して訴状を作成して幕府に提出した。<sup>(67)</sup> 金剛峯寺は、大師御手印縁起や空海の御遺告を用い、阿弓河莊が旧領であることを前面に押し出して地頭を否定する主張を展開したのである。そして前訴が棄却さ

れたことに對しても、平惟仲押領によつて他門管領という状況になつていたこと、その間にも金剛峯寺からの訴えにより元暦元年には右大將家御下知を給わつたこと、当山領は貞応・嘉祿に新補地頭停止の御下知も下されていることなどを主張し、金剛峯寺領では地頭知行の年紀や安堵が適用されないことを訴えた。

しかしこの後も、訴訟はまったく進展しなかつた。翌嘉元三年（一三〇五）六月、上莊預所の禪海は鎌倉で、幕府に訴訟を取り上げてもらうため奔走していた。禪海から金剛峯寺の年預に送つた六月一〇日付けの書状が残されている。<sup>(68)</sup>鎌倉では、疫病の流行により病死するものが多く、さらに長雨によつて山崩れも起こるなどの災害も発生し、また五月には、「駿州（宗方）妖亡」、すなわち北条時村を暗殺した北条宗方が貞時によつて誅殺される事件（嘉元の乱）が起こり、混乱した状況にあつた。そのため御評定は山中別邸にて行われているものの有名無実であり、大訴ができる状況ではないこと、なんとか御拳状を奉行には付したが、世間の物騒や内縁の禁忌によつて、まったく事が運ばない状態であることなどが報告されている。そのなかで、禪海は訴訟が難治であることをくり返しながら、「この訴訟が所務に懸けられたら正体ないことであり、こちらの所存ではない。くり返し地頭を退けるよう訴える」と述べており、この訴訟が所務沙汰に懸けられてしまつては意味が無く、検断沙汰に懸けて地頭を廃止することがこの訴訟の目的であることが示されている。金剛峯寺としては地頭と妥協して支配を実現するのではなく、あくまで地頭を排除することが目指されていたことがわかる。

それから一年以上経つた嘉元四年（一三九七）八月、ようやく金剛峯寺の訴状が受理され、地頭湯浅氏に訴状と具書が示され、陳弁を求める御教書が出された。<sup>(69)</sup>これに對して湯浅氏側は徳治二年（一三〇七）八月に陳状を提出した。<sup>(70)</sup>地頭湯浅氏側の陳状も、よく練り上げられたもので、金剛峯寺の主張を覆すに十分な証拠をそろえたものであつた。大師御手印縁起の旧領のなかには、金剛峯寺が知行しておらず他権門領となつている所領が九ヶ所あること、また金剛峯寺の当知行の内に重代御家人が所職をもっている莊園が二ヶ所あること、そのほか他人が知行している所も数カ所あることなど、それぞれの所領の詳細も記しながら反論をおこない、阿弓河莊地頭職については、永仁六年に幕府

から「可安堵本職」との下知状を給わっていることを示し、その正当性を述べた。

これ以降、裁判の記録は残されておらず、鎌倉で訴訟にあたっていた禅海が徳治三年（一三〇八）正月二二日に訴訟の証拠書類として使用した文書を返納していることから、このときまでには訴訟は終結したものと考えられる。

結局金剛峯寺は、幕府訴訟においても地頭湯浅氏を排除することはできなかった。御手印縁起は対湯浅氏訴訟においても、湯浅氏が現実的に築いてきた紀伊国における幕府御家人としての政治的立場のまえに、その効力を発揮できなかったのである。

## おわりに

金剛峯寺は寂楽寺から立券文書を獲得して以降、実際に阿弓河荘に対してどの程度支配を実現できたのだろうか。先にみたように、金剛峯寺は建治三年に文書を得るとすぐに預所を任命して阿弓河荘支配に乗り出したかのように見える。しかし、最初の弘安元年の勝算任命の後、同六年には訴訟に功績があったとして真算に替え、永代門跡の相伝を承認するとしながら、乾元二年には、これもまた訴訟に功績があったとして三宝院遊蓮房阿闍梨に替えている、その後、嘉元二年には禅海が上荘預所となっており、禅海は鎌倉にて訴訟のため奔走していた。また下荘預所には嘉元二年には良朝が、その後空達房が一期の間任じられたが結局「不知行」のため請文は返却された。<sup>(73)</sup> 預所を任命しても、実質的な荘園支配・経営は実現できておらず、預所は実質的には訴訟担当者として任命されているのが実情であった。湯浅氏との相論に敗れた後のものとして、高野山文書のなかには、「えん慶二年五月日」と判読されている阿弓河荘預下文案がある。<sup>(74)</sup> 預所の袖判が据えられ、百姓に対して在家内田畠山野を保とうとする者は在家公事夫役を勤めること、在家田畠の質入・売買などについての非法停止の命令を下している。これが延慶二年（一三〇九）のものである。ば、金剛峯寺領としての預所の支配を示す文書となるが、この文書の紙背は、正嘉頃（一二五七—五九）とみられる

「むま殿」(馬入道願蓮)宛ての宗範消息で、本来寂楽寺もしくは円満院にあった文書であると考えられる。また預所下文の内容も円満院の直務支配の頃のものである可能性がある。年号の判読についても不審があるが、いまは確定的なことは言えず、この史料の解釈については後考を俟つこととしたい。その他には、高野山文書のなかに金剛峯寺による現地経営を示す文書は残されていない。阿弓河荘は応永七年(一四〇〇)まで金剛峯寺領として当知行地とされていたが、目指していた直務支配は実現しえなかったのではないだろうか。

最後に、なぜ金剛峯寺は金山あげて阿弓河荘の獲得と地頭排除にこだわったのか、という点について考えてみたい。それはやはり阿弓河荘が御手印縁起において旧領の南堺とされていたことにつきるだろう。阿弓河荘を金剛峯寺領とすることが、御手印縁起の旧領四至を実体化し、その効力を発揮させて旧領四至内の他の荘園獲得する足がかりとなると認識されていたからではないだろうか。

金剛峯寺はこの後、元弘二年(一二三三)にも、阿弓河荘関連の文書について、「寺領村々地頭職停止事」とある將軍家下文や、地頭免除の下文などの確認をしており、この段階においても、地頭排除の可能性を模索していたようである。そして、翌年、鎌倉幕府が滅亡すると、元弘三年一〇月八日、「高野山四至内所領等事、任弘仁官符・承和縁起、所寄附金剛峯寺也、永代領知不可有相違」とする後醍醐天皇の綸旨(元弘の勅裁)を獲得した。<sup>(76)</sup>これにより、御手印縁起の四至内はほぼ金剛峯寺領となった。しかし金剛峯寺の御手印縁起を用いた旧領回復運動が、基本的には王権の主體的発動としての徳政政策に規定されていたことを指摘した白井克浩の見解があり、また後醍醐天皇の「元弘の勅裁」も、後醍醐天皇側の意図によるものであり御手印縁起の効力を疑問視する松永勝巳の見解がある。<sup>(78)</sup>阿弓河荘の旧領回復訴訟の実態から明らかとなるのも、御手印縁起自体が効力を発揮し寺領化が実現したわけではなく、寺領化実現後、金剛峯寺は御手印縁起を最大限利用して地頭排除に臨むが、それも結局は失敗に終わったということであった。だが現実には御手印縁起の効力は限定的であったとしても、阿弓河荘寺領化と地頭排除に向けた全山一致の旧領回復運動が、金剛峯寺の権力構造の確立や膝下荘園確保に向けた動向に、大きな影響を与えたことは確かである。こ

の阿弓河莊回復訴訟はその点から評価する必要があるう。

注

- (1) 『人文学報』五一—四九号（歴史学・考古学第四六号）、二〇一八年。
- (2) 『人文学報』五一—七九号（歴史学・考古学第四九号）、二〇二二年。
- (3) 仲村研「阿弓河莊研究の問題点」（安藤精一編『和歌山の研究』第二卷、清文堂、一九七八年のち、仲村『中世地域社会の研究』高科書店、一九八八年所収）。
- (4) 高橋修「阿弓川莊—領主間の争いと百姓たちの闘争—」（山陰加春夫編『きのくに莊園の世界』上巻、清文堂、二〇〇〇年）、同「阿弓川莊」（網野善彦他編『講座日本莊園史8近畿地方の莊園Ⅲ』吉川弘文館、二〇〇一年）。同「書評 小山靖憲著『中世寺社と莊園制』（日本史研究 四五七号、二〇〇〇年）にも高橋の見解が示されている。
- (5) 小山靖憲「高野山御手印縁起の成立」（『中世寺社と莊園制』塙書房、一九九八年所収、初出は一九八七年、小山「高野山御手印縁起と莊園制」（同前、初出は一九八八年）。
- (6) 山陰加春夫「中世寺院と「悪党」（清文堂、二〇〇六年）、同『新編中世高野山史の研究』（清文堂、二〇一一年）。金泰虎「高野山の御手印縁起について」（『東アジア研究』第一五号、一九九七年）。松永勝巳「遺告としての高野山御手印縁起」（『史学研究集録』二五号、二〇〇〇年、同「高野山旧領回復運動の展開」（『国史学』一七四号、二〇〇一年）。白井克浩「高野山の旧領回復運動と神領興行法」（『年報中世史研究』二七号、二〇〇二年）。海津一郎「高野山御手印縁起と中世国家」（『紀州経済史文化史研究所紀要』三八号、二〇一七年、同「後醍醐による「御手印縁起」の制作」（『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第六九集、二〇一九年）など。
- (7) 海津「蒙古襲来」吉川弘文館、一九九八年、同「紀伊国一宮興行と高野山旧領回復」（『巨大開発進展展地の地域社会の形成と変貌に関する歴史的総合的研究』和歌山大学紀州経済史文化史研究所、一九九九年）、同「天野丹生神社の古文書について」（『紀伊国天野郷現地調査報告』和歌山大学海津研究室、一九九九年）、「永仁の「紀州御合戦」考—悪党の時代と評価をめぐる—」（『相剋の中世』東京堂出版、二〇〇〇年）、海津一郎『新 神風と悪党の世紀』（岩田書院、二〇一八年）。
- (8) 訴状が残存していないことについては、白井克浩注6論文にも「旧領回復」をめぐる建保相論関係文書群には、金剛峯寺が勝訴した野川郷民等の狼藉関係のものしか残存しておらず、金剛峯寺が敗訴した訴訟に関するものが意図的に失われていることが指摘されている。
- (9) また本稿では『高野春秋編年輯録』（以下『高野春秋』と略記）も部分的に参考としたい。『高野春秋』は江戸時代に高野

山の学僧春潮房懷英が編纂した高野山の編年史で、高野山側の視点で恣意的に史料解釈がなされているところも多くあり注意が必要だが、現在では失われている文書を引用していたり、当時の文書配列をもとに考察していたりするなど、使い方によっては有益な情報を得ることができる。

(10) 小山注5論文。

(11) 阿補遺七。仲村研編『紀伊国阿弓河荘史料』（吉川弘文館、一九七六年）所収の文書については「阿＋番号」で示す。なお阿弓河荘関係文書については、注1、2論文および本稿巻末の文書目録を参照。なお本論文で用いた高野山文書についてはすべて『宝簡集・続宝簡集・又続宝簡集』CD-ROM版で写真を確認した。

(12) 阿補遺八。赤松俊秀「高野山御手印縁起について」（『続鎌倉仏教の研究』平楽寺書店、一九六八年）、仲村研前掲注3論文。金泰虎前掲注6論文。なお、赤松の十一世紀初頭成立説を支持する研究としては、武内孝善「御手印縁起の成立年代について」（『密教学研究』二七号、一九九五年）、上島享「本願手印起請の成立」（『鎌倉遺文研究』三五号、二〇一五年）がある。

(13) 阿一九。

(14) 治承四年二月日高倉院序下文（『高野山文書』続宝簡集四六一三八三）。

(15) 阿二八、二九、三〇。

(16) 阿三二、三六。

(17) 阿三七、『吾妻鏡』元暦元年七月二日条。

(18) 阿二五〇、今江広道「紀伊国阿弓河荘の伝領関係」（『書陵部紀要』一五号、一九六三年）。

(19) 阿四四、四五。

(20) 阿七三、七四、七五。（承久元年）二月一八日後鳥羽上皇院宣案（『高野山文書』宝簡集四八一五六〇）。白井注6論文。

(21) 阿九四。

(22) 阿一二四、一二五、一二六。

(23) 白井注6論文。

(24) 阿二三六。

(25) 阿二三九。

(26) 阿七。

(27) 詳細は注2論文を参照のこと。

(28) 阿二四二。

(29) 阿二四四。

- (30) 阿二九。後欠部は『高野山文書』又続宝簡集三四—四〇一。
- (31) 阿二五〇。
- (32) 阿二五三。
- (33) 海津注7論文。弘安八年九月日高野山檢校注進状写(宝寿院文書)。
- (34) 阿二六八。
- (35) 阿二五八。
- (36) 高橋修『中世武士団と地域社会』(清文堂、二〇〇〇年)。
- (37) 仲村が根拠としたのは、正応四年一〇月五日湯浅定仏起請文(阿二六二)であるが、定仏が莊官職を所持していたのは真国莊や河上莊であり、この起請文は阿弓河莊のものではない可能性が高い(『高野春秋』正応四年一〇月五日条(阿二六三)、嘉元二年一〇月一三日沙弥定仏田地讓状(『高野山文書』続宝簡集六六—六八八)、建武元年九月二日河上莊預所方維掌職請文(阿三三六)、高橋修『湯浅党の構成』(前掲注36著書)。
- (38) 小山靖憲注7論文。
- (39) 山陰加春夫「『高野合戦』攷」(『中世寺院と「悪党」』清文堂、二〇〇六年所収、初出は一九九八年)。海津一郎「永仁の『紀州御合戦』考—悪党の時代と評価をめぐって—」(佐藤和彦先生退官記念論文集刊行委員会編『相剋の中世』東京堂出版、二〇〇〇年)。
- (40) 山陰注39論文。
- (41) 阿三一四。
- (42) 阿三〇三、三〇四、三〇五。
- (43) 阿二七七。
- (44) ただし嘉元二年七月一三日高野山衆徒請文案(阿二九四)によれば、地頭湯浅氏からの「本解・第二度状、武家御文」は本所に付されず、第三度の状が初めて来たと述べている。第三度の状とは湯浅左衛門入道西仏代宗保の訴状を指していることから、その前の二度の訴状とは、阿三〇三・三〇四・三〇五に見える乾元二年閏四月日、嘉元二年六月日の湯浅浄智の訴状であったと考えられる。この主張が正しければ、浄智の訴状はすぐには高野山には通達されていなかった可能性もある。
- (45) 阿二四四(第二条目まで、後欠)。この文書は、弘安元年八月日衆徒契状・請文と貼り継がれており、『大日本古文書 高野山文書』・『紀伊国阿弓河莊史料』ではそのまま翻刻がなされているが第一紙と第二紙は別文書である。なお、この文書は後欠となるため年月日は不明だが、訴訟の経緯から考えて、乾元二年(一二三三)段階以外には想定できない。

- (46) 阿二七六。  
 (47) 阿二七八。  
 (48) 阿二七九、二八一。  
 (49) 阿二八四、二八七。  
 (50) 阿二八八。  
 (51) 阿二九〇。  
 (52) 阿二八九。  
 (53) 阿二五八。  
 (54) 阿二九二、三〇三、三〇五。  
 (55) 阿二九四。  
 (56) 阿二九五。  
 (57) 阿二九六。  
 (58) 阿二九三。  
 (59) 金泰虎「阿弓河庄における庄務権と文書」(『人文論叢』二三、一九九四年)。  
 (60) 阿二九七。  
 (61) 阿三〇五。  
 (62) 阿三〇二。  
 (63) 阿三〇三。  
 (64) 阿三〇四。  
 (65) 阿三〇六、三〇八、三〇九。  
 (66) 阿三〇六。  
 (67) 阿三〇八、三〇九。  
 (68) 阿二九一。  
 (69) 阿三一〇。  
 (70) 阿三一四。  
 (71) 阿二九七。  
 (72) 阿二七七。

(73) 嘉元三年八月日金剛峯寺御影堂奉納文書新定目録下(『高野山文書』続宝簡集六二一五—一三)。

(74) 阿三一六。なお、海津一朗は「徳政の流れ 仏神から経済へ」(村井章介編『日本の時代史10 南北朝の動乱』吉川弘文館、二〇〇三年)において、この文書を「本在家徳政令とも呼ぶべき本所法」として取り上げた。この第三項目には「在家田畠山野ヲせうのかたニ取たる物、皆本在家ニ返とらすへし」とあるが、基本的にその内容は在家公事・夫役・綿の弁済にかかる取り決めである。本文中に述べたように、文字、文書の伝来などからも、延慶二年の金剛峯寺支配下のものとするには疑問もあるが、明確な見解を示すまでには至っていないため、海津の見解に対しては、ここでは判断を保留しておく。

(75) 阿三二四。

(76) 『高野春秋』元弘三年一〇月八日条。

(77) 白井注6論文。

(78) 松永注6論文。

# 阿弓川荘関係史料目録 (三)

	和暦	西暦	月	日	文 書 名	原出典 (※1)	阿弓河荘史料(※2)	遺文	備 考
223	嘉元2	1304	6		阿弓河荘悪行人交名注文	『高』又続57-1142	292	鎌21879	
224	嘉元2	1304	7	11	阿弓河上荘預所神海起請文	『高』宝33-424	293	鎌21892	
225	嘉元2	1304	7	13	高野山衆徒請文士代	『高』又続79-1454	294	鎌21893	
226	嘉元2	1304	7	22	権少僧都頼成書状	『高』又続78-1396	295	鎌21911	
227	嘉元2	1304	7		金剛峯寺衆徒一味契状	『高』宝70-820	296	鎌21922	
228	嘉元2	1304	8	18	阿弓河荘文書取出目録	『高』又続57-1143	297	鎌21949	徳治3年1月22日の神海による追筆あり。
229	嘉元2	1304	9	25	九月二十五日条	高野春秋編年綱録巻第九	298	なし	
230	嘉元2	1304	10		十月条	高野春秋編年綱録巻第九	298	なし	
231	嘉元2	1304	10	9	代官みづいゑ書状	『高』宝16-205	300	鎌22012	
232	嘉元2	1304	10	14	高野山衆徒申状案	『高』又続79-1455	305	鎌22017	
233	嘉元2	1304	10	14	飯尾頼定等運置与奪状案	『高』又続57-1148	302	鎌22016	
234	嘉元2	1304	10	17	高野山衆徒申状案	『高』宝33-425	303	鎌22021	
235	嘉元2	1304	10	29	高野山衆徒庭申中状案	『高』又続50-977	304	鎌22025	
236	嘉元2	1304	12		阿弓河荘雜掌申中状案	『高』又続57-1150	306	鎌22499	12月16日以降に作成。
237	嘉元3	1305	5		高野山衆徒解状案	『高』又続56-1139	308	鎌22227	
238	嘉元3	1305			高野山衆徒解状案	『高』又続79-1452	309	鎌22498	
239	嘉元4	1306	8	16	関東召文御教書案	『高』又続78-1428	310	鎌22703 鎌22704	
240	徳治2	1307	8		阿弓河荘地頭披陳状并頼聖具書案	『高』又続78-1394	314	鎌23037	頼聖具書案は鎌倉遺文になし
241	延慶2	1309	5		阿弓河荘預所下文案	『高』又続78-1398	316	鎌23694	阿147の紙背。年号校訂の余地あり。 ※ 3
242	元弘2	1332	1	11	阿弓河荘証文校合状案	『高』又続56-1137	324	鎌31655	

※1 『高野山文書』又続宝簡集は『高』又続、続宝簡集は『高』続宝、宝簡集は『高』宝、それぞれ略表記をしている。

※2 仲村研編『紀伊阿弓河荘史料一、二』(吉川弘文館、1976)。目録作成にあたって、本史料集に阿弓河荘関係史料として所載しているものであっても、明らかに阿弓河荘のものではないと判断した史料は本目録では除外した。

※3 おわりに、注74参照。